

## 保護者支援の困難感に関する保育者への面接調査の分析(2) —保育者が子どもの排泄の自立の過程において抱く困難感に着目して—

岸本 美紀\* 武藤 久枝\*\*

### 要 旨

本研究では、保育者が保護者支援で抱く困難感について、子どもの排泄の自立の過程における保護者支援に着目して分析することで、保護者支援のあり方について示唆を得ることを目的とする。保育者の面接調査の結果から子どもの排泄指導に関する意見を抽出し、子どもの状況、保護者の対応、保育者の対応に整理して分析を行った。その結果、保育者が子ども、保護者の様子や態度から支援に困難感を抱いている状況が把握できた。そして、子どもの排泄の自立のためには、その遅れている理由を保育者が把握し、子どもの心身の成長や保護者の状況を捉えながら、家庭と共通理解をもって支援をすること、また、保護者に伝わりやすい、保護者が実行しやすい支援の必要性が示唆された。

キーワード：保護者支援、困難感、面接調査、排泄の自立

### I. はじめに

平成 29(2017)年改訂「幼稚園教育要領」では、幼児の生活のために、家庭との連携を十分図ることが示されている<sup>1)</sup>。同年に改定された「保育所保育指針」においても、保育所の役割として、その目的を達成するために、家庭との緊密な連携の下に保育を行うことが求められていることがうかがえる<sup>2)</sup>。幼保連携型認定こども園でも同様である<sup>3)</sup>。

幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園では、上記のような保護者との連携が保育者の職務として求められているが、実際は金城他(2011)<sup>4)</sup>、成田(2012)<sup>5)</sup>などから、保育者が保護者への対応に困っていることが明らかである。岸本他(2019a)<sup>6)</sup>では、これらの先行研究から保育者が保護者支援で抱える困難感の内容と構造を分析し、困難感を大きく「保護者自身に起因する困難感」「保育者自身に起因する困難感」「関係性に起因する困難感」の3つに分類し、保護者の養育態度や特徴から困難感が生じると捉えている保育者が多いことを報告した。また、岸本他(2019b)<sup>7)</sup>では、保育者を対象とした面接調査を行い、その逐語記録から、保育者が保護者支援で抱く困難感の内容を具体的に分析している。その結果、時間

やルールを守らないなどの「自己中心的な保護者」、保護者に伝える内容や関わり方などの「伝え方・対応の仕方」、しつけや対応を園任せにする「保護者の養育態度」が、保育者に困難感を抱かせる主な3項目であることが明らかとなった<sup>8)</sup>。岸本(2019b)<sup>9)</sup>の回答者のしつけとは、食事や衣服の着脱、排泄などを想定していると考えられる。

この中の排泄について、保育所や幼稚園での取り組みについて資料を整理する。まず保育所の場合、平成 29 年改定「保育所保育指針」第 2 章 保育の内容 2 1 歳以上 3 歳未満児の保育に関わるねらい及び内容 において、領域「健康」の内容として⑦「便器での排泄に慣れ、自分で排泄ができるようになる。」が示されている<sup>10)</sup>。3 歳未満児が通う保育所では、子どもの排泄の自立についての支援は保育士が行うべき専門的な援助としてここでは考えられている。加えて領域「健康」の(ウ)内容の取扱いに、「子どもの基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、家庭との適切な連携の下で行うようにすること」が求められており、排泄の自立についても家庭と連携して行うと位置づけられている<sup>11)</sup>。山田他(2018)は、トイレ・トレーニングにおける保育園と家庭の連携支援について文献研究を

\*岡崎女子大学 \*\*中部大学

行い、トイレット・トレーニングが順調に進む連携とは、保育士や幼稚園教諭と母親または家族との意思疎通が図れることが条件としてあることを示唆している<sup>12)</sup>。

しかし、実際の取り組みについては、幼稚園教諭を対象に質問紙調査を行った齋藤他(2010)において、家庭でできていない場合に幼稚園にトイレット・トレーニングを頼る例が認められている<sup>13)</sup>。また、幼稚園・保育所の3, 4, 5歳クラス幼児の排泄の自立の実態と保育者の意識を分析した金山他(2007)では、子どもの排泄の自立時期が遅れる理由として、保育者の約6割が「トイレット・トレーニングを園に依存する傾向が強まっていること」、「家庭のトイレット・トレーニングへの取り組み時期が遅くなっていること」と考えていることを明らかにしている<sup>14)</sup>。また幼稚園の保護者からの個別の対応を要するニーズは、家庭との関連が深く、保護者との連携が不可欠であるものの、その連携が難しい場合の問題を齋藤他(2010)が指摘している<sup>15)</sup>。岸本他(2019a)でも、保育者が保護者支援で抱く困難感の分析から、保護者との連携の難しさが指摘されている<sup>16)</sup>。子どもの成長・発達のために家庭と連携して対応することは、保育者の職務として求められているが、子どもの排泄の自立に向けて、実際には困難な場合もあると考えられる。

園において子どもの排泄指導を保育者が行う場合、家庭との連携で保育者がどのような困難感を抱くのかを解明することは重要である。そのため、本研究では、子どもの排泄の自立のために保護者と関わる際、どのような点に困難感を抱くのかを保育者の回答から明らかにすることで、子どもの排泄の自立の過程における保護者支援に必要な視点や支援のあり方について示唆を得ることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 対象

個人的に依頼を行った16名の女性保育者。

保育歴：1～5年：7名、6～10年：3名

11～20年：4名、20年以上：2名

所属：保育所：10名、幼稚園：6名

### 2. 方法

#### (1)調査方法

個人的に依頼した保育者に対して、保護者支援に

関する半構造化面接を個別に行った。主な内容は藤野(2014)<sup>17)</sup>を参考に設定した、保護者支援で印象に残っていること、困ったこと・難しいこと、保護者支援に必要な資質・力量、保護者支援のために役に立った学生時代の学びや経験などである。

面接内容については、文書で確認しながら対象者の了承を得た上で、ICレコーダーに録音し、逐語記録を作成した。

### (2)分析方法

#### ①逐語記録からの抽出

保育者に実施した面接調査において、「保護者支援で困ったこと・難しかったこと」に関する逐語記録から、子どもの排泄指導における保護者との連携で保育者が抱いた困難感に関する記述を抽出した。

#### ②記録の分析

①で抽出した記述について、「子どもの状況」、「保護者の対応」、「保育者の対応」に分けて分析を行った。

次に、「子どもの状況」は、保育者の回答から子どもの年齢が判断できたため、子どもの年齢別で分類した。「保護者の対応」と「保育者の対応」は、内容が似た記述を集約し、「保護者の対応」は、「要求」、「関心が薄い」、「否定・不実行」の3項目、「保育者の対応」は、「保護者への働きかけ」、「配慮」、「我慢」、「要望」、「疑問」の5項目に分類した。

## 3. 倫理的配慮

面接調査については、平成27年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会の承認を得て行った(通知番号2)。また、対象者に対しては、研究の趣旨、個人情報の取り扱い等について説明し、同意を得られた場合に同意書に記入を求めた上で、面接調査を実施した。

## III. 結果及び考察

### 1. 面接調査結果の分析と分類

調査対象者16名のうち6名から、子どもの排泄指導に関する保護者との連携で困難感を抱いた記述が抽出されたため、この6名を分析対象者とした。分析対象者6名全員保育所勤務であり、分析結果は保育所での支援に関するものである。その内容を「子どもの状況」、「保護者の対応」、「保育者の対応」別に、表1に示す。

表1 子どもの排泄場面における「子どもの状況」、「保護者の対応」、「保育者の対応」

子どもの状況	保護者の対応	保育者の対応
<p>①3歳未満児</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・土日挟むと戻る(土日の家庭での生活により、排泄の自立に向けて進んでいたことが戻ってしまう)</li> <li>・失敗だらけ(2歳児)</li> </ul> <p>②3歳以上児</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ウンチをパンツの中に入れている</li> <li>・時間を決めて誘っても、「冷たいから」、「寒いから嫌だ」と言ってトイレに行かない</li> <li>・やっと紙おむつが外れそう</li> <li>・年中に上がるギリギリまでオムツが外れなかった</li> <li>・4歳児だが、排泄の自立ができていない</li> <li>・紙おむつがおしっこでいっぱいになったまま登園する</li> </ul>	<p>①要求</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(子どもがまだ何度も排泄の失敗をするのに)「パンツにしてほしい」と言う</li> <li>・ウンチが出そうになった時「うちの子は、紙おむつじゃないとできない」と言った</li> </ul> <p>②関心が薄い</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特に言っていない</li> <li>・(子どもの排泄が自立していないことを)気にしていない</li> <li>・(子どもの排泄の成功を伝えても)「そうですか」と、関心を示さない</li> <li>・(特別な対応に)感謝はないが、了解をした様子である</li> </ul> <p>③否定・不実行</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・登園前に子どもの排泄を済ませてくることを忘れる</li> <li>・「朝たくさん出て、オムツを替えました」と言った(実際はオムツにいっぱい排泄している)</li> <li>・「家ではできます」と言う(園では、子どもは排泄の自立ができていない)</li> </ul>	<p>①保護者への働きかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「成功したよ」と伝えた</li> <li>・パンツで登園するようにお願いしている</li> <li>・「トイレで座ろう」と言っている</li> <li>・「こういう風にやっている」ことは伝えている</li> <li>・子どもにやる気になってもらうための対応を提案した</li> <li>・着替えをたくさん持ってきてもらった</li> </ul> <p>②配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これで自立に向かえば、母親もうれしいのかな</li> </ul> <p>③我慢</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・母親は本当のことを話してくれない</li> <li>・何も言えない</li> </ul> <p>④要望</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家で対応してほしいなと思う</li> <li>・トイレット・トレーニングは保育所だけではできない</li> </ul> <p>⑤疑問</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(子どもの)妹はオムツが外れているので、(子どもの排泄の自立に関心が薄いことに対して)余計に「なんなんだろうな」と(疑問に)思った。</li> </ul>

注：括弧（ ）内は、分析対象者の回答に基づき筆者が補足した内容である。

(1) 子どもの状況

①3歳未満児

分析対象者6名のうち2名から、3歳未満児の記述が抽出された。表1のように3歳未満児において、排泄の自立の過程で子どもが失敗や退行をする姿は、年齢や発達を考慮すると問題があるとは考えにくい。しかし、「休日を挟むと戻る」という記述からは、園でできていたことが休日の家庭での対応によってできなくなることや、「失敗だらけ」という記述では、対応が上手くいっていないことが推察される。家庭での支援が十分できていな

いことや保育者自身の支援だけでは子どもに対応できていないことが、保育者の困難感となり得るのではなかろうか。

②3歳以上児

清水他(2008)が行った調査では、3歳児頃には全員が昼間のオムツが取れているという結果であった<sup>18)</sup>。一方、金山他(2007)の調査では、4月時点で担当クラスにオムツ使用児が1人以上いる回答が3歳児クラスでは92.2%という結果であった<sup>19)</sup>。本研究でも「年中に上がるギリギリまでオムツが外れなかった」という回答があった。これらのこと

から、ほとんどの子どもが排泄の自立をしていると考えられる3歳児クラスに、自立していない子どもが存在することは珍しいことではないと推察される。しかし、4歳児クラスでは、オムツ使用児がいる割合が調査園全体の11.6%にまで減少する(金山他, 2007)<sup>20)</sup>。表1からは、4歳を過ぎてもまだ排泄の自立ができていない子どもが、面接対象者の中で少なくとも1名存在している。ほぼ排泄の自立ができていない年齢において自立していない子どもがクラスにいることは、保育者に特別な対応や配慮が求められることが推察される。このようなことから、子どもの排泄の自立の遅れは、保育者に困難感を抱かせるのではなかろうか。

また、子どもがオムツを替えてもらえていない状態で登園する姿もみられた。保護者が園で替えてもらうことを期待しているのか、または育児能力に問題があるのかについては現資料では判断はできない。しかし、家庭でも子どもの排泄の自立に向けて主体的に取り組むかどうかなど、保護者の姿勢や取り組みが、子どもの排泄の自立に影響を与えていることが推察されるため、これらについて詳細な検討が必要である。

## (2) 保護者の対応

「保護者の対応」を「要求」、「関心が薄い」、「否定・不実行」の3項目に分類し、考察する。

### ①要求

表1の「(子どもがまだ何度も排泄の失敗をするのに)『パンツにしてほしい』と言う」、「ウンチが出そうになった時『うちの子は、紙おむつじゃないとできない』と言った」が該当する。

岸本他(2019a)では、保育者が保護者支援で抱く困難感について先行研究から分析しているが、「園に要求や不満が多い」「要求がエスカレートする」などの「要求の強い保護者」は、カテゴリー数が5番目に多かった<sup>21)</sup>。本研究の資料からは、保護者がどこまで要求したのか詳細は不明であるが、子どもの発達段階に合わない指導を保護者から要求されることは、保育者にとって困難感を抱く要因となることが推察される。

### ②関心が薄い

表1の「特に言ってこない」、「(子どもの排泄が自立していないことを)気にしていない」、「(子どもの排泄の成功を伝えても)『そうですか』と、関心を示さない」、「(特別な対応に)感謝はないが、了解をした様子である」が該当する。

保育所保育指針解説(2017)の序章には「保育

所には、保護者と連携して子どもの育ちを支えるという視点を持ち、子どもの育ちを保護者と共に喜び合うことを重視して支援を行う」ことが示されており、さらに第2章では、子どもの基本的な生活習慣の形成のために家庭と連携をすることが示されている<sup>22)</sup>。このようなことから、子どもの排泄の自立の過程において、子どもに変化が見られた場合、保育者がその様子を伝え、保護者と喜び合い、連携して取り組むことが期待されていると考えられる。加えて前田他(2004)では、母親の9割以上が子どものトイレット・トレーニングが上手くいった時「うれしかった」と回答している<sup>23)</sup>。この結果から、多くの母親が子どもの排泄が成功していく過程を喜んでいることが推察される。しかし、表1の保育者の回答からは、保育者が子どもの排泄の自立に向けて連携しようとしていたり、排泄の成功などを共に喜び合おうとしていたりしても、関心を示さない、肯定的な反応が返ってこないなどのような保護者の姿がうかがえる。保護者が消極的な取り組みとなっている状況について、特に保育所の場合は、子どもを通わせる保護者の回答から、「保育士にトレーニングしてもらった」、「園のトレーニング方法と連携させながら進めている」など、保育士にトレーニングをしてもらっていると考える保護者がいることを笠原他(2001)は明らかにしている<sup>24)</sup>。また、村多他(2014)でも「家庭が主となってトレーニングをするべきである」という回答は、幼稚園の保護者と比べ保育所の保護者は少ないことが示唆されている<sup>25)</sup>。このようなことから、保育所に子どもの排泄の自立に向けての対応を任せ、家庭での取り組みが消極的になっている保護者がいることが推察される。

### ③否定・不実行

表1「登園前に子どもの排泄を済ませてくることを忘れる」、「『朝たくさん出て、オムツを替えました』と言った(実際はオムツにいっぱい排泄している)」、「『家ではできます』という(園では、子どもは排泄の自立ができていない)」が該当する。お願いしたことを忘れていたり、園では子どもの排泄が自立していないことを受け止めていない保護者がいることがうかがえる。

齋藤他(2010)では、食育など個別対応を必要とするニーズにおいて、家庭との連携の難しさが挙げられている<sup>26)</sup>。また、片山(2016)は、若手保育者が保護者支援で感じる困難の内容をカテゴリー化し、

そのサブカテゴリーに「こちらが伝えることをなかなか理解してくれない保護者への対応」を挙げている<sup>27)</sup>。本研究の結果からは、排泄の自立においても、家庭との連携が難しい状況や伝えたことが保護者に受け止められていないことは、保育者が困難感を抱く要因となりうることが示唆された。

### (3) 保育者の対応

表1の内容から、「保育者の対応」を「保護者への働きかけ」、「配慮」、「我慢」、「要望」、「疑問」の5項目に分類し、考察する。

#### ①保護者への働きかけ

表1の「『成功したよ』と伝えた」、「パンツで登園するようお願いしている」、「『トイレで座ろう』と言っている」、「『こういう風にやっている』ことは伝えている」、「子どもにやる気になってもらうための対応を提案した」、「着替えをたくさん持ってきてもらった」が該当し、保育者が保護者に対して、家庭での取り組みを依頼したり、子どもが排泄に成功したことや園での取り組みについて伝えたりしていることがうかがえる。

保育所保育指針解説(2018)に示されるように<sup>28)</sup>、保育者が、子育てに関する助言や子どもの育ちを保護者に伝え共に喜び合うことを実行していることが推察される。

#### ②配慮

表1の「これで自立に向かえば、母親もうれしいのかな」が該当し、保護者への対応に困難感を抱いた事例の抽出であるものの、保護者への気持ちに寄り添う保育者の様子がうかがえる。

保育所保育指針解説(2018)では、「保育士等が保護者の不安や悩みに寄り添い、子どもへの愛情や成長を喜ぶ気持ちを共感し合うことによって、保護者は子育てへの意欲や自信を膨らませることができる」と示されている<sup>29)</sup>。表1の記述からは、子どもの排泄を自立させることで、それを保護者と共に喜び、保護者の育児の意欲につなげようとする保育者の意図が推察される。

#### ③我慢

表1の「母親は本当のことを話してくれない」、「何も言えない」が該当し、保育者が保護者への伝達をためらう姿がうかがえる。

岸本(2019b)では、保護者に「どこまで伝えたらいいのか」などが含まれる「伝え方・対応の仕方」は、保育者が抱く困難感の内容として2番目にカテゴリー数が多かった<sup>30)</sup>。子どもの排泄に関する保護者への対応においても、保育者は、保護者に子

どもの様子を伝える必要性を理解していても、子どもの排泄の自立に向けて何をどのように伝えたらよいか、保護者の状況や特徴から困ることがあるのではなかろうか。

#### ④要望

表1の「家で対応してほしいと思う」、「トイレ・トレーニングは保育所だけではできない」が該当する。保護者が子どもの排泄の自立に向けて取り組むことは、保育者が望むことであると推察される。

子どもの排泄の自立のための支援は、保育者が専門性を発揮して行うものであるが、平成29年改定「保育所保育指針」では、基本的な生活習慣の形成に向けて、家庭との連携の下に進めることが示されている<sup>31)</sup>。一方で、笠原他(2001)<sup>32)</sup>や村多他(2014)<sup>33)</sup>が明らかにしたように、排泄の自立を園に任せている保護者がいる。家庭と連携して進めたい保育者にとって、子どもの排泄の自立の支援を任されることは、困難感を抱く要因になることが推察される。

#### ⑤疑問

表1「(子どもの)妹はオムツが外れているので、(子どもの排泄の自立に関心が薄いことに対して)余計に『なんなんだろうな』と(疑問に)思った」が該当し、保護者の受け止めや反応に戸惑う保育者の様子がうかがえる。

保育所保育指針(2017)では、第4章子育て支援に「保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びを感じられるように努めること」<sup>34)</sup>とあるが、本研究の保育者の回答からもわかるように、保護者の状況や心情は様々である。そのため、保育者がそれらを理解し、受け止め、保護者が子どもの排泄の自立について前向きになれるような取り組みを考える必要があるのではなかろうか。

## IV. まとめと今後の課題

本研究では、子どもの排泄の自立の過程に焦点を当てて、保育者が保護者支援で抱く困難感について、保育者の回答から記述を抽出し、分析した。記述は、すべて保育所における支援に関するものであり、「子どもの状況」、「保護者の対応」、「保育者の対応」別に分析を行った。

「子どもの状況」については、抽出された6項目の記述のうち4項目が3歳以上児に関する記述だった。3歳以上児では、ほとんどの子どもが排泄

の自立をしているため、していない子どもへの対応は個別となり、保育者が保護者支援で困難感を抱く要因となりうるということが推察される。保育者が子どもの排泄の自立が遅れている理由を把握し、子どもの心身の成長や保護者の状況を捉えながら、家庭と共通理解をもって支援をすることが必要ではなかろうか。

しかし、「保護者の対応」の分析からは、子どもの実態に合わない支援を求める保護者や子どもの排泄の自立に関して関心が薄い保護者がいることがうかがえた。そのような保護者に対して、「保育者の対応」の分析からは、具体的に家庭での取り組みを依頼したり、子どもの成長を伝えようとしたりしている保育者がいた。その一方で、保護者に言えなかったり、反応が乏しい保護者に戸惑ったりする保育者の姿もうかがえた。保育者は自身の意欲や取り組みが保護者に伝わらないことに困難感を抱くことが推察されたため、保護者に伝わりやすい方法や、保護者が実行しやすい支援のあり方を検討する必要があるだろう。

以上のように、保育所保育指針等から子どもの基本的な生活習慣の形成は、家庭と連携をしながら進めることが求められているものの、本研究からは子どもの排泄の自立に関して、保護者と連携が取れているとは言い難い状況であり、保育者が困難感を抱くことが多いことが示唆された。

本研究では家庭との連携を困難にしている状況は把握できたものの、家庭との連携につながる要因や支援のあり方まで検討できなかった。そのため、今後は成功事例を検討することで、子どもの排泄の自立のための保護者支援を検討することが課題と考える。

加えて、本研究は、保育者の回答から分析した結果であるため、子どもの排泄の自立に関する保護者の意識や取り組みについて把握し、関連させて検討する必要性が考えられる。また、保育者は保護者のどのような特徴や言動に影響を受け、伝達や連携を躊躇するのか、さらに詳細な分析が必要であろう。

## 付記

岸本：I～IV

武藤：本研究の計画や方法の考案をした。また、I～IVについて、専門的内容に関する助言を行っている。

## 謝辞

面接調査にご協力いただきました保育者の皆様に、心より感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 『幼稚園教育要領』(平成29年告示)、フレーベル館
- 2) 厚生労働省 『保育所保育指針』(平成29年告示)、フレーベル館
- 3) 内閣府 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』(平成29年告示)、フレーベル館
- 4) 金城悟・安見克夫・中田英雄(2011)「保育職の大変さとやりがいに関する保育者の意識構造について—M-GTAによる分析の試み」『東京成徳短期大学紀要』第44号、pp.25-44
- 5) 成田朋子(2012)「保護者対応に求められる保育者のコミュニケーション力」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第34号、pp.65-75
- 6) 岸本美紀・武藤久枝(2019a)「保育者が保護者支援で抱える困難感の内容と構造—先行研究の分析結果から—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第52号、pp.39-46
- 7) 岸本美紀・武藤久枝(2019b)「保護者支援の困難感に関する保育者への面接調査の分析」『中部大学現代教育学研究紀要』第13号、pp.25-32
- 8) 前掲7)
- 9) 前掲7)
- 10) 前掲2)
- 11) 前掲2)
- 12) 山田真衣・竹村眞理(2018)「トイレトレーニングにおける支援体制に関する文献検討」『健康科学大学紀要』第14号、pp.231-237
- 13) 齋藤幸子・須永進・青木知史・山屋春恵(2010)「幼稚園における保護者のニーズとその対応に関する調査」『日本子ども家庭総合研究所紀要』第46集、pp.247-255
- 14) 金山美和子・丸山良平(2007)「幼稚園・保育所の3,4,5歳クラス幼児における排泄の自立の実態と保育者の意識」『上田女子短期大学紀要』第30号、pp.49-59
- 15) 前掲12)
- 16) 前掲6)
- 17) 藤野紀子(2014)「幼児期の自閉症児を持つ母親と家族の変化のプロセス」『保育学研究』第52巻第2号、pp.66-75

- 18) 清水敦彦・板場昌栄・兵藤友妃子・石川悦代・尾花恵子・石崎優美・新井真麻・藤原五月・齋藤美希・石原寿美子・武藤由莉・藤掛由美子・平澤深雪(2008)「幼児の基本的生活習慣の研究Ⅲー特に幼児の排泄の習慣についてー」『足利短期大学研究紀要』第28巻、pp.25-29
- 19) 前掲14)
- 20) 前掲14)
- 21) 前掲6)
- 22) 厚生労働省『保育所保育指針解説』平成30年3月、フレーベル館
- 23) 前田美子・堀井奈緒・長谷川嘉奈子・廣瀬幸美「幼児の排泄のしつけに関する研究～しつけに伴う母親の気持ちとうまくいかなかった時の対応～」『チャイルドヘルス』7巻11号、pp.878-882
- 24) 笠原昇一・南部春生・小熊陽子・川合洋子・伊藤崇・穴倉迪彌・常松喜久子・本間美知子(2001)「乳幼児の生活と健康に関する調査研究(第6報) 保育園児の『排泄のしつけ』に関する調査」『北海道医報』第977号附録、pp.16-23
- 25) 村多綾香・平元泉(2014)「幼児のトイレット・トレーニングに対する保護者の意識」『秋田県母性衛生学会雑誌』28巻、pp.33-39
- 26) 前掲12)
- 27) 片山美香(2016)「若手保育者が有する保護者支援の特徴に関する探索的研究ー保育者養成校における教授内容の検討に生かすためにー」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第6号別冊、pp.11-20
- 28) 前掲22)
- 29) 前掲22)
- 30) 前掲7)
- 31) 前掲2)
- 32) 前掲24)
- 33) 前掲25)
- 34) 前掲2)